

# 栄養系学生のためのイギリス栄養学・英語研修：実践報告

津 田 晶 子

## Short-term EFL Experience for Japanese Dietetic Students in the UK: A Case Study

Akiko Tsuda

(2015年11月27日受理)

### 1 はじめに

本稿では、栄養士を目指す短期大学部の学生が、英語圏であるイギリスで短期語学研修に参加することで、どのような異文化体験をし、外国語学習に対する態度が変化するかを報告する。この科目は冬季集中の選択科目であり、テーマ（ねらい）及び到達目標、評価方法は以下のとおりである。

本科目は、海外での語学研修のクラスで、以下の3点がねらいです。

1. 英語の四技能を伸ばす。
2. 異文化理解
3. 異文化体験を通じた人間的成長

到達目標

1. 語学学校やホームステイ先で、教員、学生、ホストファミリーと積極的な態度でコミュニケーションする。
2. 日本の文化（特に食文化）を英語で簡単に説明できる。
3. イギリスの現地の栄養士事情について学び、日本と現地の差異について、考えることができる。

（中村学園大学シラバスより）

イギリス、ケント州にあるカンタベリーでの短期語学研修は、本学食物栄養学科1年生を対象に2014年度から開始された。本稿で報告する第二回目の研修は、2015年2月28日（土）～3月16日（月）の17日間にわたって実施され、食物栄養学科1年生の19名の学生が、参加した。引率教員として津田晶子が参加したほか、本ツアーの旅行実施者から女性のツアーコンダクターが同行した。実施校のコンコルドインターナショナルはブリティッシュカウンシルの認証を受けた40年の歴史がある中規模校で、日本人職員が常駐しており、午

後からの栄養施設見学には日本人の通訳が同行と、手厚いサポートを受けながらの実施である。

なお、この科目には学生に課題として、以下を課した。

事前課題：

- ① 「イギリス」「カンタベリー」「ロンドン」のいずれかについて、各自テーマを決めてレポートを書く。（日本語で可）

学生の多くが初めての海外渡航である。「世界史」や「世界地理」を履修していない学生はイギリスに対するイメージさえもわからないものもいた。基本的な情報をインターネットや図書館でリサーチし、さまざまにイメージを広げて、研修の準備をしてほしいということでこの課題を与えた。

- ② イギリス映画を各自、視聴し、感想文を書く。（原稿用紙1枚以上）

米語と英語の違いを知り、イギリス文化に触れることが目的である。図書館にイギリス映画が所蔵されているので、数例を示し、感想文を書かせた。

期間中の課題：

- ③ 英語日記。形式自由。難しい表現や自分が伝えたいことについては日本語で書いてもよい。

参加資格を特に問うてないため、学生の英語のレベルはさまざまである。文法が多少間違っているでもいいから、辞書を使いながら、その日の行動や感じたことを自由に書くようにさせ、文法や単語のミスの訂正は1か所のみと決めて、コメントを書いて返却した。レシートや搭乗券を貼ったり、その日に歩いた歩数を記録したりと、楽しい旅の記録になったようである。

- ④ イギリスの好きな食べ物についてプレゼンテーション（日本語）

2週目になると、だんだん、日本食が恋しくなり、イギ

リスの食事に苦情を言う学生が出てきた。そこで、「自分が現地でおいしいと思ったイギリスの食品で日本では入手にくいもの」について、午後の自由時間、教室を借りて、一人ひとり、プレゼンテーションをさせた。評価の対象外ではあるが、良い情報交換の場になったと思われる。

## 2 語学研修

研修実施校のコンコルドインターナショナルはカンタベリーを中心に位置している。ここでは毎週月曜日の午前中にプレイメントテストが実施されており、今年度の参加者は試験の結果、初級コース2名、初級準備コース13名（3クラスに分割）、基礎コース5名の3つのレベルに分かれての受講である。月曜日の午後より各自のレベルに応じて、多国籍の学生とともに少人数制のインターナショナルクラスで学ぶが、この学校では、クラス内でも同じ国籍のもの同士ばかりで固まらないように配慮されている。（写真①、写真②）

授業は月曜日から金曜日までで、午前中3時間はクラスごとにコミュニケーションを中心とした英語を学び、午後からはバスに乗り、さまざまな施設見学に出かける。週末はカンタベリーの市内観光をしたり、ロンドンまでバスツアーに参加したりと、各自で自由行動をする。ただし、学生1名での行動は禁じ、遠出をするときはホストファミリーや通訳、ツアーコンダクターが同行することとした。

なお、校長の方針により、引率教員である私は、基本的に授業に参加したり、見学したりすることはできなかった。また、現地の法律により、児童の写真を撮影するのには一定の書面での手続きが必要であるなど、日本

とは事情がかなり違う。授業中は、ツアーコンダクターとともに、コモンルームで待機し、学生の英語日記に目を通し、コメントを記入していたため、学生が毎日、何を学んでいるかをうかがい知ることはできた。

## 3 英国栄養系施設の視察

コンコルドインターナショナルの企画運営により、今年度は4か所の施設を見学した。

- ① クッキングスクール訪問：ケント州は Garden of England（イングランドの庭園）とも呼ばれ、緑豊かな田園州で、農業が盛んであり、新鮮な食材がふんだんにある。学生たちは、バスに乗って海辺の町、Sandwich と Deal の間の Golf Road にあるレストラン兼料理学校 Chequers Kitchen Cookery School を訪れ、シェフのお話を聞いた後、アップルスコーンの料理師範を見学、試食した。
- ② Queen Elizabeth The Queen Mother Hospital の給食施設訪問：管理栄養士 Ms. Vicky Pout による病院現場の栄養士の業務に関するレクチャーを聴き、病院食の試食をした。ここでは、「イギリスにおける Dietician と Nutritionist との違い（イギリス英語では、一般的にはあまり意識して区別せずに使う人が多いが、前者の方がより専門性が強い印象がある）」、「イギリスにおけるコミュニティでの栄養士の役割 National Health Service（国民保健サービス、略称 NHS）による公立の病院では、入院期間が短いため、とにかく患者に量を食べさせることが大事という発想」「栄養士が地域を巡回して、栄養指導を実施する、コミュニティ栄養士の役割」などについて何うことができた。学生から「これから栄養士になる私たちに



写真①

研修実施校のコンピュータールーム



写真②

研修実施校の教室

アドバイスを」という質問に Ms. Vicky Pout から「コミュニケーション力を身につけること」「チャンスをつかむことが大事」というメッセージをいただいた。

- ③ チャリティー団体“AGE UK”の見学：カフェで紅茶をいただいた後、高齢者向けのサービスや調理場を見学した。イギリスではボランティア精神が旺盛で、カフェやミニライブラリー、美容室などがあるこの施設も多くのボランティアで支えられている。また、カンタベリーには AGE UK が運営するチャリティーショップもある。このチャリティーショップとは、チャリティーの目的で市民が古着や古本、日用品を寄付するもので、カンタベリーだけでなく英国のストリートのいたるところで見られる。
- ④ 現地の栄養士（Dietician）Ms. Siobhan Shalaby による講演：Ms. Shalaby の専門は「児童栄養」で、現在はフリーランスの栄養士として活躍している。「イギリスでは栄養士の資格は更新制度を取っており、日々の努力が肝要であること」「栄養指導の結果が不服として訴訟を起こされる場合もあるため、自衛手段として保険に入る栄養士が多いこと」「栄養士に最も必要とされるのはコミュニケーション力であること」「（イギリスでは）栄養士という資格を得ると、多様なキャリアが準備されていること」など、ご自身の経験を交えてお話していただいた。

#### 4 ホームステイ

コンコルドインターナショナルの手配により、学生たちは2人ずつに分かれてホームステイを経験した。今年度はホストファミリー宅がすべて徒歩圏内にあり、学生たちは片道15～20分くらいをかけて通学している。事前に、希望を書いたシート（ペットの有無やアレルギーなど）とホストファミリー宛の手紙を学校に送ってある。栄養系の学生に特化したものとして、研修プログラムを組んであり、コンコルドインターナショナルもホストファミリーを厳選しているとのことである。自分で日本食を作った学生、同じステイ先のイタリアの留学生とパーティーをした者、ステイ先のホストファザーがシェフでホストブラザーが調理師専門学校の生徒だったという学生など、それぞれに貴重な経験をしたようだ。日本では自宅生で他人と暮らしたことがない学生もおり、初めはみな、緊張した面持ちであったが、ホストファミリーと別れるときは皆、別れを惜しんでいた。

#### 5 イギリス人のチャリティー活動、レッドノーズデイ

1988年以来、隔年（ここ数年は奇数年）で3月の第2または第3金曜日に実施されるチャリティー運動で、日本の「赤い羽根」運動に似ており、当地ではレッドノーズ（赤い鼻）を買うことでチャリティー活動に貢献できる。日本でも、イギリスの人気 Boy Band、One Direction が“One Way or Another”の楽曲でレッドノーズデイのキャンペーンに協力したことで広く知られるようになった。2015年は3月13日がこのレッドノーズデイにあたり、コンコルドインターナショナルでも、レッドノーズをつけた教職員たちが学校のティールームでケーキやドーナツ、紅茶などを提供し、学生たちも募金活動に協力していた。（写真③）

#### 6 イギリスの食体験

学生たちは毎日3食、ホストファミリーから食事を提供される。日本と異なり、家庭料理は質素で、朝食はシリアルとトースト程度、昼食はサンドイッチと果物、夕食はマッシュポテトに肉、ピザやパスタなどが一般的だ。イギリスの標準的な家庭よりも、今回のホストファミリーの食事はかなりよいと思われるが、食物栄養学科で1年間、学んできた学生にとっては単調と感じられることもあったかもしれない。

カンタベリーやロンドンのカフェで食事をし、イギリスの食体験を楽しんだ学生も多かったようだ。学生に人気のあったカンタベリーでの食体験は、日本食レストラン（写真④）がある。当地では、日本食はヘルシーなアジア系の食事として、今や現地化している。写真のペジ



写真③

レッドノーズデイで提供されたお菓子



写真④

日本食レストランのベジタリアンラーメン



写真⑤ ジャケットポテト  
カフェでよくあるメニューの一つ。



写真⑥  
フィッシュアンドチップス

タリアンラーメンは昆布出汁で、他にもキムチ出汁でハラルチキンを添えたハラルラーメンなど、イギリスの多文化を象徴するメニューがあった。カフェの人気メニュー、ジャケットポテト（写真⑤）はイギリスの名物料理のひとつだ。皮付きのまま焼いたポテトにチーズやサラダ、チキンなどの具材を選んで注文する。イギリスを代表する大衆料理のフィッシュアンドチップス（写真⑥）も多くの学生が食していた。

## 7 今後の課題

### 課題1：事前テスト、事後テストの導入

2014年度は、前述の提出課題と、語学学校からのレポートをもとに学生を評価した。本科目のねらいは前述のとおり、「1. 英語の四技能を伸ばす。」「2. 異文化理解」「3. 異文化体験を通じた人間的成長」としているが、具体的に数値で測ることの難しい2,3は除くとして、「1. 英語の四技能」については、事前テスト、事後テストを導入することによって、ある程度、四技能の効果を測定し、学生にフィードバックを与えることが可能と考えられる。海外研修においても、N-Portalを通じてMoodleを積極的に利用することで、学生が、自分のスピーキングやライティングを提出することもできる。

### 課題2：コミュニケーション能力の養成

今年度、学生を引率して気づいたことの一つとして、ほとんどの学生が授業外はスマートフォンを常時、さわっていることである。日本の友人に今、イギリスで体験していることをすぐに伝えたいのは理解できるが、スマートフォンを眺め、お互いに会話をしないさまは奇異に映るし、何と言っても、スリの多いイギリスでは不用心である。

学生の多くが、イギリスに来て、「ガイジン」と現地のイギリス人のことを呼ぶことも気になった。「あなたたちのほうが、ここでは、いうなれば、ガイジン」ということを言ったが、真意が伝わっただろうか。学生には、語学を学ぶだけでなく、コミュニケーションのあり方についても考える機会を与えたいと考えている。

### 課題3：日本の文化（特に食文化）の発信能力の養成

前述の到着目標のうち、「2. 日本の文化（特に食文化）を英語で簡単に説明できる。」については、今年度は学生の事前研修の時間を十分に取れなかったこともあり、出発前に十分に準備させることができなかった。今後はMoodleを使って、日本の文化を紹介している英語サイトを学生に提示したり、日本の文化を英語で読んだり、聴いたりする機会を十分に与え、発表の練習をする機会を与えたいと考えている。

## 謝 辞

今回の海外研修の企画，運営に当たっては，短期大学部食物栄養学科の教員の皆様，学部大学院事務室（当時）の平田純一係長にはお世話になりました。心から感謝申し上げます。

## 参考文献

Chequers Kitchen Cookery School

<http://www.chequersrestaurant.com/index.shtml>（2015年9月28日アクセス）

Red Nose Day

<http://www.comicrelief.com/rednoseday>（2015年9月28日アクセス）

Turnbridge Well Hospital (siobhan-shalaby)

<http://www.spirehealthcare.com/tunbridgewells/our-facilities-treatments-and-consultants/our-consultants/siobhan-shalaby/>（2015年9月28日アクセス）